2. 調査結果

2.1. 回答校の基本情報

(1) 入学定員

高等部（本科）の入学定員は「21～30 人」が最も多く、本設問に回答した学校の 37%を占め、「30 人以下」を足し合わせると 63%と半数を大きく上回る。

この表に集計されていないものとして「若干名」「年度により変動」（各 1 件）という回答が寄せられている。

なお、この設問では無回答が多く、高等部（本科）では 15 件から回答が得られていない。

図表 2-1　入学定員

	小学部	中学部	高等部（本科）	高等部（専攻科）
10 人以下	2	3	4	2
11～20 人	6	5	5	2
21～30 人	1	2	13	0
31～40 人	0	1	4	0
41～50 人	0	0	4	0
51 人以上	1	0	5	0

(2) 学部全体の生徒数

以下は学部全体の生徒数である。学校によりその規模感に相違があることがわかる。

図表 2-2　学部全体の生徒数

	小学部	中学部	高等部（本科）	高等部（専攻科）
20 人以下	12	16	6	3
21～30 人	7	6	9	1
31～50 人	5	7	7	0
51～70 人	4	7	9	0
71～100 人	7	3	9	0
101 人以上	3	0	12	0

(3)　　教員の人数

教員の人数は各学部いずれも「11～20 人」とする回答が最も多く、これに次ぐのが「10 人以下」となっている。

図表 2-3　学部全体の生徒数

	小学部	中学部	高等部（本科）	高等部（専攻科）
10 人以下	8	12	10	4
11～20 人	11	14	11	0
21～30 人	7	9	7	0
31～40 人	4	3	9	0
41～50 人	5	1	7	0
51 人以上	3	0	8	0

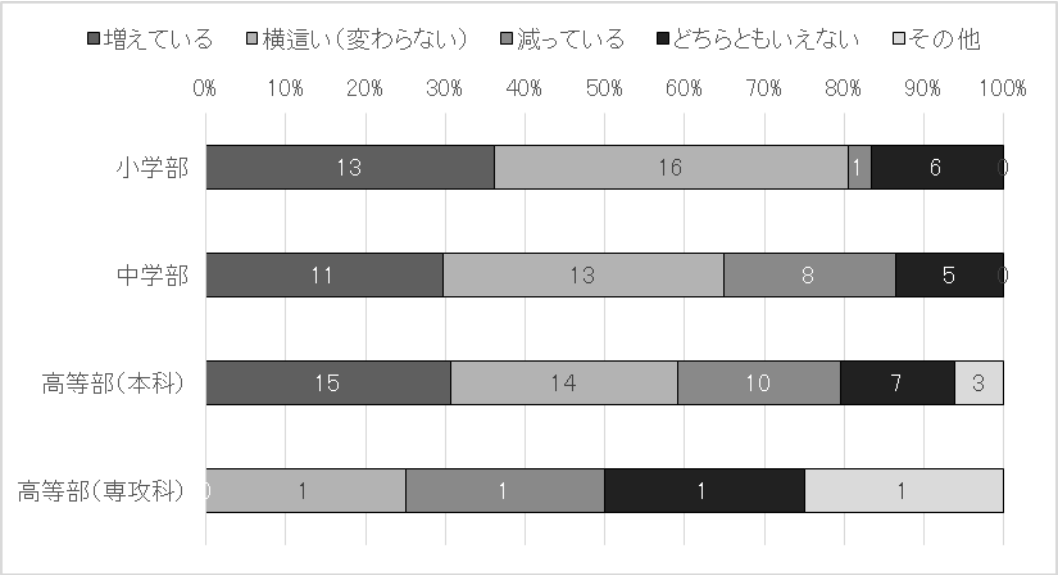
(4)　　入学希望者の増減傾向

以下のグラフは、各学部における入学希望者の増減傾向（直近 5 年程度）について問うた結果である。

小学部では「横這い（変わらない）」が最も多く 44%を占め、これに次いで多いのは「増えている」（36%）となっている。中学部も同様で、「横這い（変わらない）」に次いで「増えている」という回答が多い。

高等部（本科）は「増えている」が最も多いものの、「横這い（変わらない）」が僅差で続いており、「減っている」という回答も 2 割強となっている。

図表 2-4　入学希望者の増減傾向（直近 5 年程度）



	増えている	横這い（変わらない）	減っている	どちらともいえない	その他
小学部	13	16	1	6	0
中学部	11	13	8	5	0
高等部（本科）	15	14	10	7	3
高等部（専攻科）	0	1	1	1	1

「その他」として寄せられたコメントを以下に列記する。

（高等部（本科））

- 年度によって増えたり減ったり
- ３年前に特別支援学校宇都宮青葉高等学校（県立）開校により、一時的に減少したが、その後は大きな変化はない。
- 開校２年目であり、全学年そろっていない科がありどちらともいえない
- 平成２８年４月開校した分教室で一クラスのみである
- 微増傾向

（高等部（専攻科））

- 内部進学しかしていない。

2.2. 教育内容・進路の現状

2.2.1. 設置学科・選考方法等

(1) 設置学科

普通科が 45 件、職業学科が 9 件であった。職業学科については「学科名」「修業年限」「めざす職業（職種）」の回答を求めた。その結果を以下に一覧で示す。

図表 2-5 職業学科

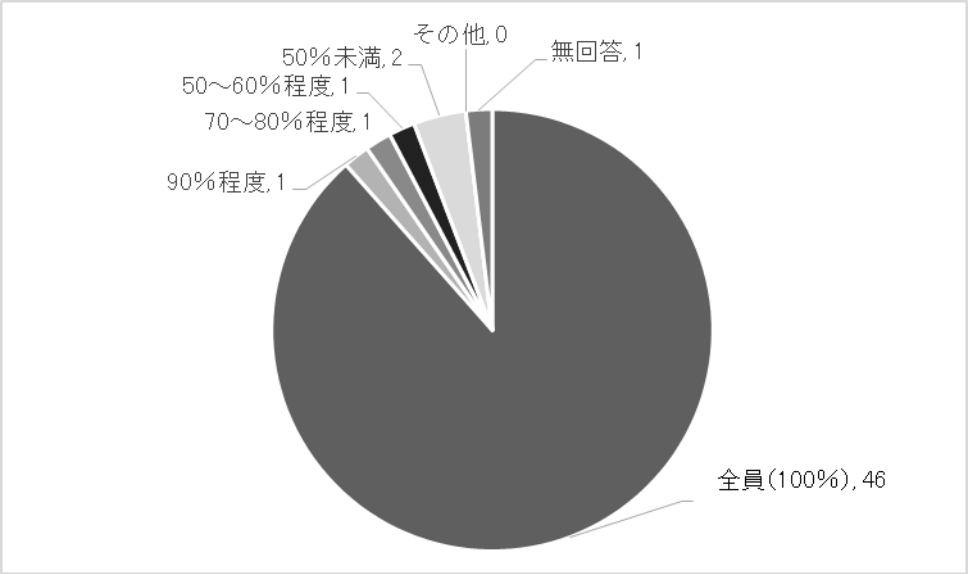
職業学科の名称	修業年限	めざす職業（職種）
環境・福祉科	3	清掃業、飲食業、介護福祉など
産業科	3	一般就労
生活科学科 農産技術科 加工生産科 流通・サービス科	3	生徒の特性・興味に応じて選択
産業技術科　流通サービス科と福祉科	3	
産業技術科	3	不特定
産業科	3	特に決めていない

産業科	3	製造業 清掃業 農業　など
サービス総合科	3	清掃（ビルメンテナンス）・福祉現場の補助 ・製造　等
生産園芸科 工芸意匠科 生活環境科	3	農業 製造業

(2) 出願前の教育相談・面談の実施状況

以下のグラフは、出願者のうち「出願前に教育相談・面談」を受ける方のおおよその比率を質した設問の集計結果である。

図表 2-6　出願前の教育相談・面談の実施状況



回答校の 46 校（88%）が「全員（100%）」と回答しており、「90%程度」「70～80%程度」が各 1 件で、ほとんどの学校が出願の前に出願予定者の教育相談・面談を実施していることがわかる。

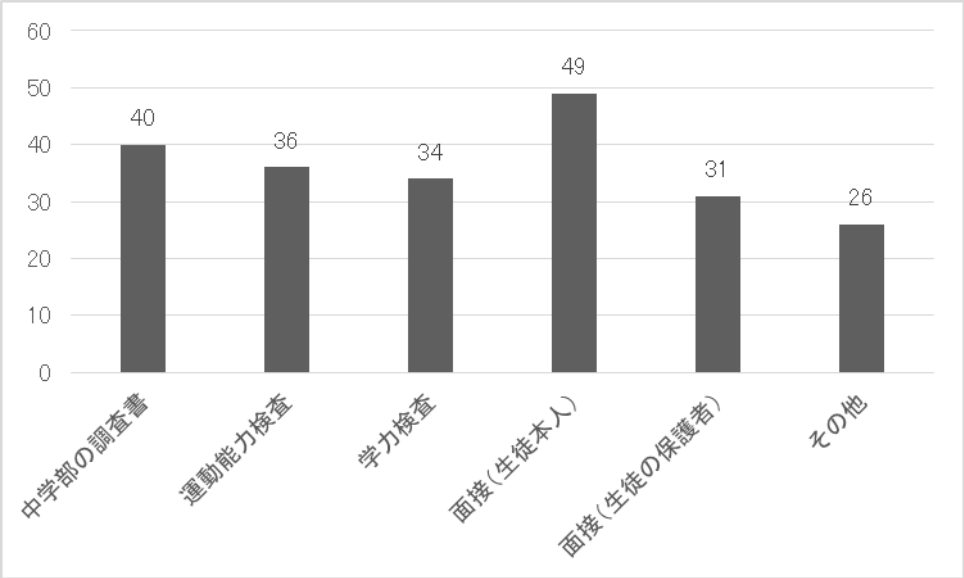
(3) 選考方法

出願者に対する選考の方法に関する設問（複数選択）の集計結果を次のグラフに示す。

最も多い選考方法は「面接（生徒本人）」の 49 件（94%）で、ほぼすべての学校が実施している。次いで多いのは「中学部の調査書」の 40 件（77%）、「運動能力検査」「学力検査」がそれぞれ 36 件（69%）、34 件（65%）と僅差で並び、「面接（生徒の保護者）」という回答も 31 件（60%）と半数を超えている。

この設問では「その他」とする回答が 26 件と多数寄せられているが、多い意見は「作業能力検査」で 20 件となっている。

図表 2-7　選抜方法



「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

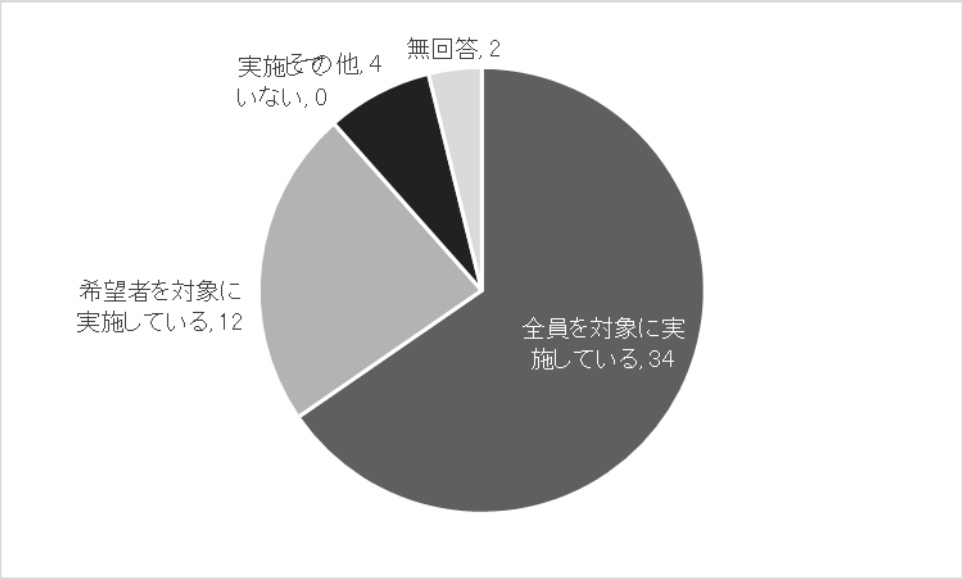
- 作業能力検査（同 13 件）
- 作業能力検査　自立活動の諸検査及び行動観察
- 作業能力検査　着脱検査
- 作業能力検査、ボルト・ナット組み立て、ビーズ選別など
- 作業能力検査、集団行動等検査
- 作業能力検査、認知能力検査
- 事前の教育相談、学校見学、体験
- 自立活動の諸検査、作業能力検査
- 社会生活能力検査
- 諸検査（身辺処理、集団行動、作業能力）
- 面接（生徒と保護者を一緒に実施。作業能力検査）
- 面談（中学担任）
- 運動能力検査
- 検診診断
- 書類審査、校医健診、諸検査、面接に基づいて総合的に判定し、合格者を決定している。
- 社会生活能力

2.2.2. 職場実習

（1）　「職場実習」の実施状況

次のグラフは、生徒が職業・職場を体験・学習する「職場実習」の実施状況を問うた結果である。最も多い回答は「全員を対象に実施している」の 34 件で、回答校全体の 65%を占める。「希望者を対象に実施している」は 12 件（23%）で、これら 2 つを合わせると 9 割に近く、「実施していない」学校は 0 校である。

図表 2-8　「職場実習」の実施状況



「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

設問の選択肢「全員を対象に」の「全員」という表現が曖昧さを含んでいたため、「その他」を選択したケースがあったことがわかる。従って実際のところは、上のグラフよりも高い比率で「学年全員を対象に」職場実習が実施されているとみることができる。

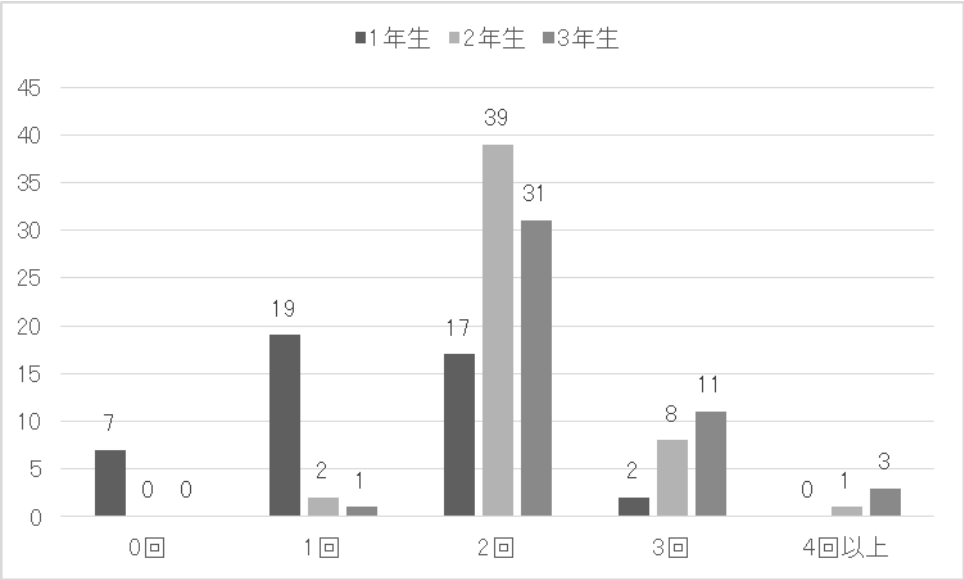
- 企業などに行っての職場実習は２年生から全員を対象に実施している
- 高等部２年、３年次に実施
- １年生は校内実習、2・3 年生は校外での実習を全員対象に実施
- 希望者を対象に実施している
- 専攻科では実施している

(2)　「職場実習」の実施回数／年間と実施期間／回

●「職場実習」の実施回数／年

次は「職場実習」の 1 年間の実施回数を学年別で問うた結果である。

図表 2-9　「職場実習」の実施回数／年



	1 年生	2 年生	3 年生
0 回	7	0	0
1 回	19	2	1
2 回	17	39	31
3 回	2	8	11
4 回以上	0	1	4

1 年生は「1 回」「2 回」という回答が多く、「0 回」という学校もある。これに対して学年が上がるごとに回数は増加する傾向が読み取れる。2 年生・3 年生のいずれも「2 回」が最も多いが、3 年生では「3 回」「4 回以上」という回答数が 2 年生を上回っている。卒業後の就職に向けて、職場での体験学習の機会を増やしている状況が窺える。

なお、上記で集計できなかった回答として 2 年生で「2～5 回」、3 年生で「複数」「1～2 回」「2～3 回」「2～10 回」という回答が各 1 件あった。

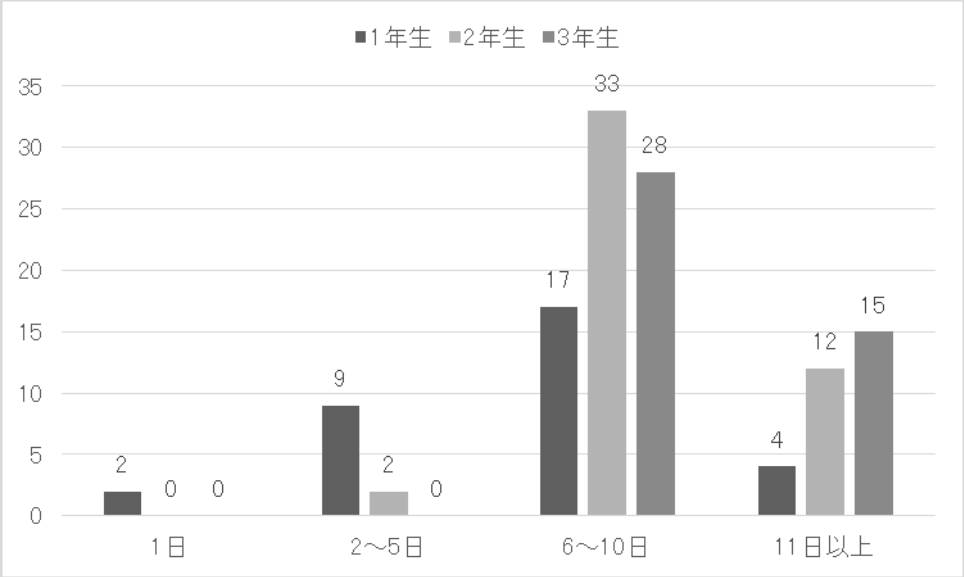
●「職場実習」の実施期間／回

続けて、職場実習 1 回あたりの日数の設問に対する集計結果を以下に示す。

1 年生から 3 年生まで最も多いのは「6～10 日」である。2 年生は 33 件（63%）、3 年生は 28 件（54%）と半数を超えている。また、「11 日以上」という学校もあり、2 年生が 12

件（23%）、3 年生が 15 件（29%）である。

図表 2-10　「職場実習」の実施期間／回



	1 年生	2 年生	3 年生
1 日	2	0	0
2～5 日	9	2	0
6～10 日	17	33	28
11 日以上	4	12	15

なお、この設問でも上記で集計できなかった回答が寄せられている。それを以下に一覧で示す。

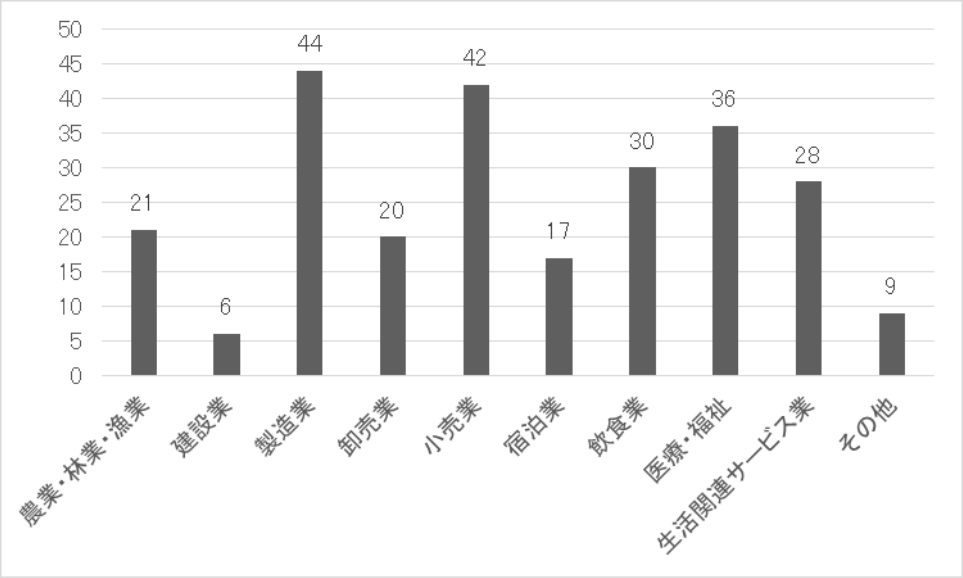
図表 2-11　実施期間／回の回答（集計対象外）

	1 年生	2 年生	3 年生
1～5 日	1	0	0
3～5 日	1	0	0
3～10 日	0	1	0
5～10 日	4	1	2
10～15 日	0	1	4
10～20 日	0	0	1
2～20 日	0	0	1
20～50 日	0	1	0

(3)　　実習先の企業等の業種

実習先の企業等の業種に関する集計結果を以下に示す。「製造業」「小売業」が僅差で並んでおり、これに「医療・福祉」が続いている。

図表 2-12　実習先の企業等の業種



「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

- 窯業
- 1 年制：年 1 回職場体験（希望者）・校内実習　福祉事業所
- 三者で話し合って決める。ニーズがあれば開拓するので制限はない。
- 本人、保護者の希望や生徒の実態に応じて実習先（業種）を決める
- 就労移行支援事業所、就労継続支援事業所（A・B 型）、生活介護事業所
- 福祉事務所（就労移行支援、就労継続支援 A 型事業所・B 型事業所、生活介護）
- 縫製業、配送業、クリーニング業、清掃業
- 各会社の清掃部門、総務部補助
- 清掃業
- 福祉サービス事業所

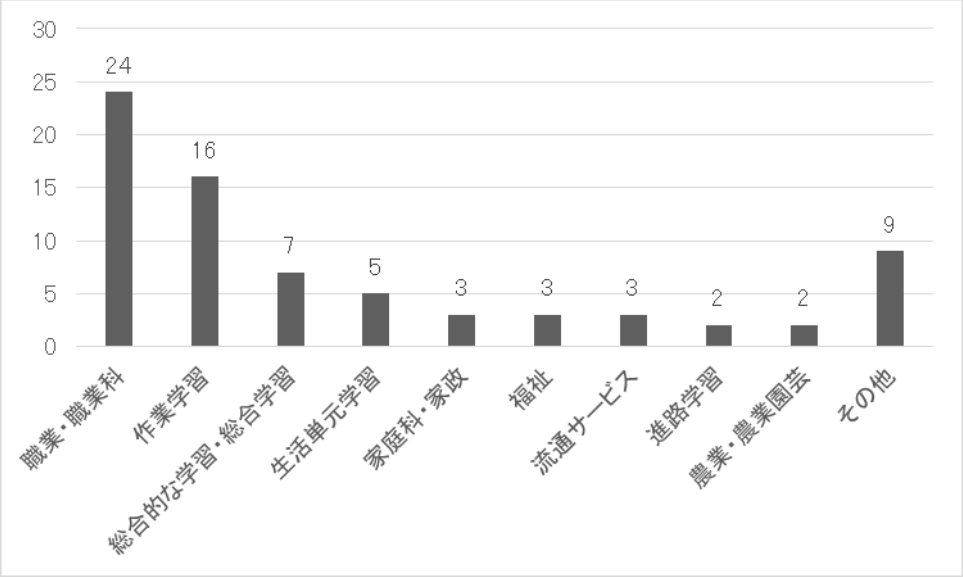
2.2.3. 職業を学ぶ教科（本科）

「職場実習」以外で、職業理解や職業生活で必要な事柄の学習を主たる目的とする教科について問うた質問の回答結果を以下に示す。この質問では、該当する教科の名称、授業時数と主な活動内容を確認している。

(1)　教科名

教科名で最も多いのは「職業」「職業科」の 24 件（46%）、これに次いで多いのは「作業学習」の 16 件（31%）である。

図表 2-13　教科名



回答が各 1 件のものについては、「その他」としてまとめた。以下にその内容を列記する。

- キャリアガイダンス
- 校内実習（製パン・製茶・調理）
- 合同職業
- 国語
- 情報化
- 職業・家庭
- 専門教科（木工・陶芸・園芸・被服・コンクリート）
- 日常生活の指導
- 教科としては取り扱っていません。

(2)　　主な活動内容

教科の主な活動内容に関する回答（自由記入）を以下に列記する。

- １年：実習事前・事後、仕事調べ、自分のことについて、働くために必要なこと等
  ２年：実習事前・事後、人とのつき合い方、健康管理について、自立した生活に向けて等
  ３年：実習事前・事後、職業に必要な力、自立した生活（健康・金銭管理）、社会人になる心構え等
- １年：実習事前・事後、働く理由、ビジネスマナー、金銭管理、作業実習等
  ２年：実習事前・事後、日々の実践目標、雇用形態と賃金、作業実習等
  ３年：実習事前・事後、卒業までのマイビジョン、支援機関、社会人としての心構え等
- 高等部指導要領教科職業に準ずる
- ・自己理解を促すための学習
  ・ＳＳＴ
  ・実習の事前事後学習を通した課題解決
- 高１～３年制：短期間の職場体験を、様々な業種で行い、自分がやりたい仕事を知ったり、適性を理解したりしながら、3年次に自分で進路を主体的に「決める」ことができるよう、授業を体系的に組み立てている
- ・Ｈ３０年度：６つの作業班（縫製・リサイクル・工芸・食品・農耕・受託）
  ・作業製品の精算・販売活動　・地域との関わりを重視した作業活動（チャレンジシップ、地域からの受託作業など）
- 週２時間
- ・社会人としてのマナー
  ・働くこと（働く意味、給料について等）
- ・自己理解、働くための知識の学習
  ・職場見学、体験
  ・職業ガイダンス
  ・職場実習（校内、現場、地元）　など
- ・自己理解、他社理解について（ＳＳＴ含む）
  ・職業理解、職業生活について
  ・実習事前・事後学習、
  ・卒後の社会生活について（余暇活動含む）
- どの教科も学習指導要領を基本にしながら学習している。
- 自己理解、将来設計、いろいろな仕事、現場実習事前事後学習、大人のマナー、コミュニケーション、金銭管理
- 実習の事前・事後学習、様々な仕事、将来の夢、職業ガイダンス、働くために必要なこ

と、社会人になるために

- 近隣の会社から軽作業の具材をいただき、ライン等のある工場に見立てた実習室で組み立て作業に取り組む。仕事をする上で要求される体力や態度、集中力等を育てることを目的としている。
- 自己理解、生活の自己管理、金銭管理（給料、税金、保険を含む)、健康と食事、マナー、余暇活用、関係機関について（支援機関，トラブル対応）等
- 家での手伝い、いろいろな仕事、作業学習の役割分担、協力するということについて学ぶ。・健康管理の大切さ。・各種スポーツ大会について（卒業後の余暇について学ぶ)。・洗顔体験（ポーラ化粧品の協力、自分の身だしなみについて学ぶ)
- ・自己理解を深めよう
  ・進路相談会に向けて
  ・社会人の生活
  ・学校や家の周りの仕事
  ・道路を考える
  ・書類の書き方
  ・働くために必要なこと
  ・社会参加、社会貢献を考えて
  ・職場見学
  ・いろいろな職業
- ・シルク加工
  ・喫茶サービス・ビルメンテナンス
- 受託作業
- 木工班、手芸班、陶芸班、農耕班に分かれての作業学習
- ・自分について知る。
  ・身の回りのルールを知ろう。
  ・働くことを知ろう。
  ・社会生活に必要な知識を身に付けよう。
  ・基本的習慣について。
  ・実習の事前事後学習
- 農業に関すること全般。
- ・将来の夢
  ・いろいろな仕事
  ・マナー
  ・経済生活　等
- ・キャリア学習
  ・働くとは

・社会人の生活
・SST
・すてきな大人になるために
・現場実習
・職場見学

- 現場実習に取り組もう
- いろいろな職業や職業生活について知識を深める。自分の長所や短所、課題について理解を深める。
- ・職業に関して 自己理解、仕事の理解、働くために必要な力、進路の選択、現場実習、社会人に向けて
- 週１回職場実習とその振り返り学習
- 食品等の箱折り、ビルクリーニング、喫茶サービス、鹿皮加工、介護福祉などの学習
- 年８回 実態別に分かれ、社会生活に必要な内容の学習を行います。（生活習慣、自己理解、職業観、勤労感、進別設計、社会組織　等）
- ものづくりや清掃、サービス等、生徒の興味関心や実感に応じて、働く意欲を育てている。
- ・学年・能力別（３グループ）グループによる学習
  ・社会生活に必要な知識・技能・態度について学ぶ
  ・身だしなみ、食生活、調理、礼状書き、金銭管理、性に関する指導など
- ・家庭の役割 ・家庭生活と消費 ・地域の食料と郷土料理　など
- どの教科も学習指導要領を基本にしながら学習している。
- 物作りを通して働く姿勢を学ぶ。また、作った物は文化祭等で販売する経験もする。１学年ですべての教科を経験し、本人の希望や適正に合わせて、２・３学年では１つの教科を学ぶ。選択した教科と就職先の職種に関連性はない。
- （課程Ｉのみ）
  ・職業体験学習
  ・ビジネスマナー
  ・清掃
  ・事務作業
- ・これからの家庭生活
  ・整理整頓
  ・身だしなみを整える
  ・食事のマナー等
- 木工、被服、陶芸、農業、園芸
- 進路に関わるビジネスマナー、コミュニケーションや進路設計のための調べ学習など
- 高齢者福祉に関すること全般。

- 手紙（礼状）を書こう
- ビルクリーニング、製作、工芸の 3 班にわかれ実際的な活動を通して、基礎的知識、技能、態度を身に付ける。
- 介護職員初任者研修
- 木工、被服、農園などの学習
- 作業学習を通して社会的能力を高めます。 1 社会で必要な知識を習得 2 働くことの喜びを実感 3 技術の向上
- ・ＰＣの基礎、基本
  ・Word Excel を使った文書作成
  ・ビジネス文書検定等の受験
- ・農耕班
  ・縫製班
  ・土工班
  ・窯業班
  ・リサイクル班
- ・働くことの意味を知ろう
  ・SNS やインターネットの正しい使い方
  ・からだの発達と性機能について知ろう
- リサイクル学習
- 働くことについて 実習について ビジネスマナー
- 野菜、花などの栽培
- 実際の作業を通して働くための態度、責任、知識、技能、身だしなみや言葉づかい、休み時間の過ごし方などを学ぶ。
- 農業班（農業）、工芸班（陶芸木工）、環境整備班（清掃等）、ビジネス班（受注の仕事）
- 働くための心構え、社会でのマナー、余暇利用などについて学習する。

2.2.4. 職業を学ぶ教科（専攻科）

（1） 教科名

回答された教科名を以下に示す。

- 総合学習
- 校内実習
- 進路学習
- 労働
- 作業学習

(2)　　主な活動内容

- 製パン・調理
- 本科と同じ（年８回 実態別に分かれ、社会生活に必要な内容の学習を行います。（生活習慣、自己理解、職業観、勤労感、進別設計、社会組織　等）
- 作業、清掃活動、軽作業、校外労働

2.2.5. 卒業後の進路

以下の表は各校が回答した進路別の人数を足し合わせた結果である。3 年間いずれの年度も「施設（通所）」が 6 割前後で最も多い。次いで多いのは「一般企業」で、3 割を上回る水準で推移している。これに対して、進学を選択する者は非常に少ない。

図表 2-14 卒業後の進路（人数の合計）

	2015 年度	2016 年度	2017 年度
一般企業	341	391	367
施設（通所）	684	686	671
施設（入所）	28	33	23
進学（専攻科）	25	17	17
進学（大学・短期大学）	0	0	0
進学（専門学校・各種学校）	8	11	10
在宅	13	15	26
その他	26	24	31
合計	1125	1177	1145

2.3. 進学に対する考え

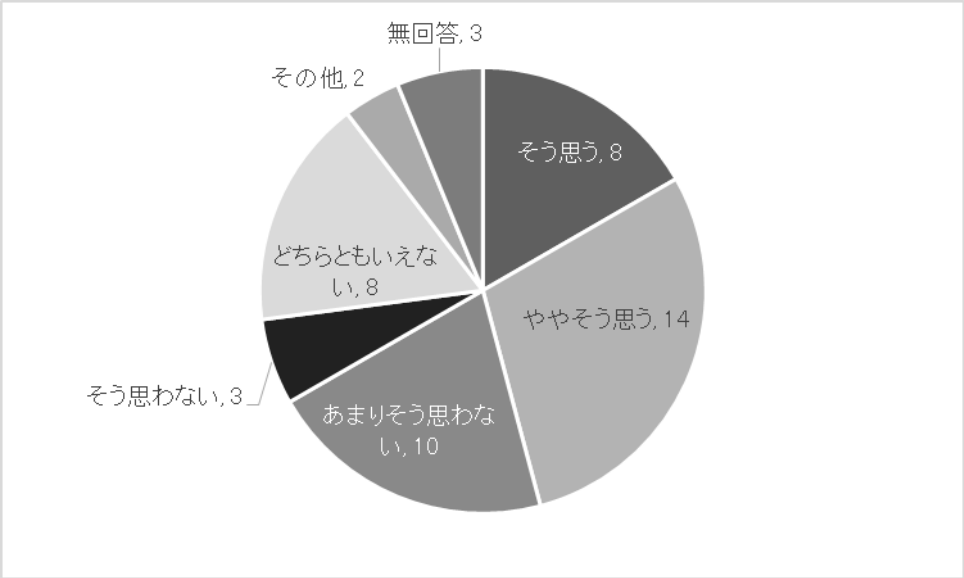
2.3.1. 進学先の必要性

(1)　　進学先の必要性

以下のグラフは、専攻科を設置していない特別支援学校に対して実施した「高等部（本科）卒業後の進学先は必要だと思うか」という質問に対する回答結果である。

「そう思う」8 件（17%）、「ややそう思う」14 件（29%）で、進学先の必要性について肯定的な意見が 46%となっている。これに対して、「あまりそう思わない」は 10 件（21%）、「そう思わない」は 3 件（6%）で、これら 2 つの意見の合計は 27%に留まっている。

図表 2-15　進学先の必要性



「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

・　県立障害者職業訓練校があるが、訓練内容が限られるため、いくつか選択肢があるとよい。
・　生徒の実態により進学することが有効でない場合がある。進学に対しては慎重に進める必要があると捉えている。

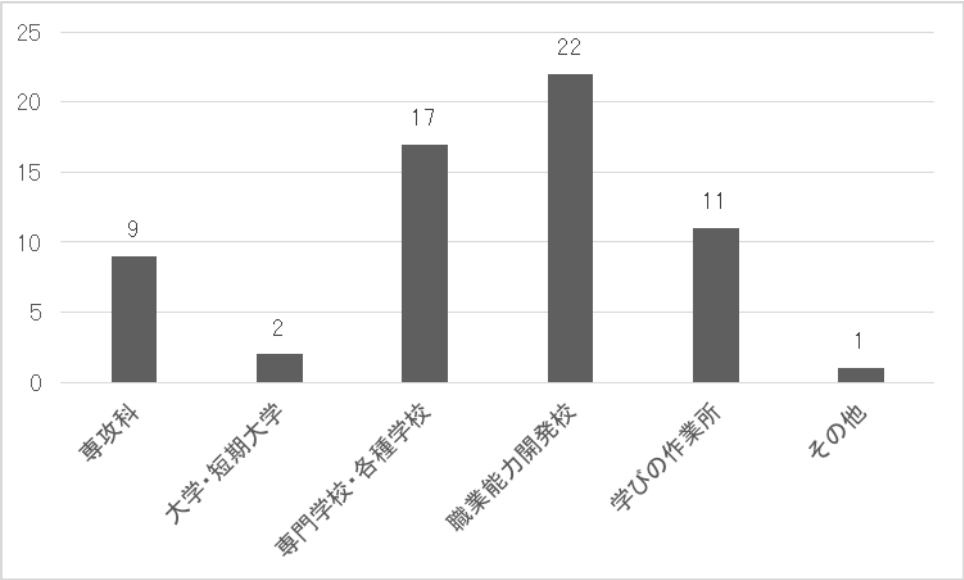
(2)　望ましいと思う進学先

次に示すグラフは、上記の設問で「そう思う」「ややそう思う」の回答者に対して「進学先として望ましいと思う教育機関・訓練施設」を問うた結果である（複数選択）。

最も回答が多かったのは「職業能力開発校」の 22 件で、前の設問で「そう思う」「ややそう思う」と回答した者 22 人全員がこれを選択している。次いで多いのは「専門学校・各種学校」で、17 件（77%）となっている。

「その他」の 1 名からは「障害者職業訓練校」というコメントを得た。

図表 2-16　望ましいと思う進学先（複数選択）



2.3.2. 生徒・保護者の意向

（1）　高等部（本科）卒業後に進学したいと考える生徒

次のグラフは、専攻科を設置していない特別支援学校に対して実施した「卒業後も「引き続き学びたい」「進学したい」と考える生徒（卒業年次生）はいるか」という質問に対する回答結果である。

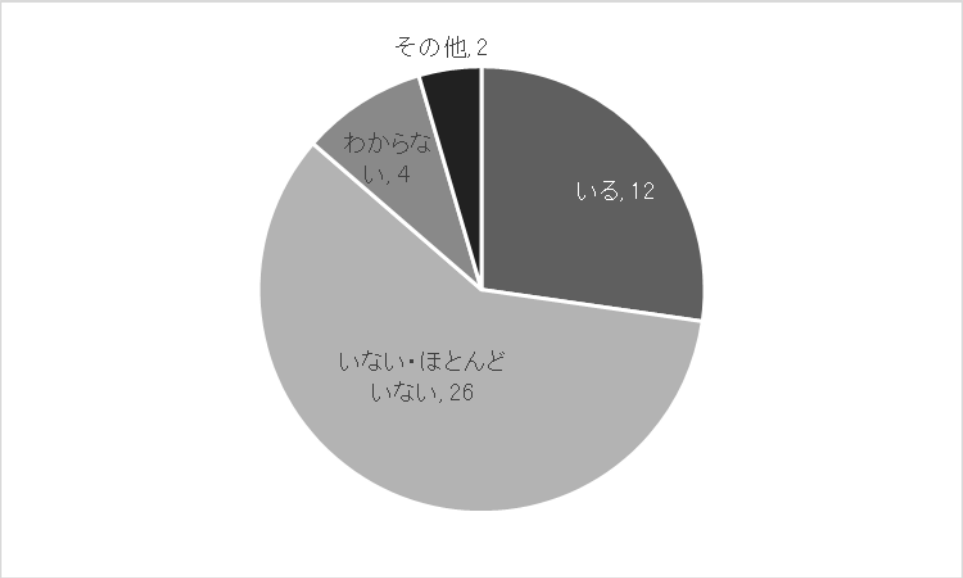
「いない・ほとんどいない」が最も多く 26 件（54%）と半数を超えている。これに対して、「いる」は 12 件（25%）に留まっている。

「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

- そのような場所がないため、話がでることはない。
- 現状では進学という選択肢がないため、実際に調査したことがないため、実数はわからないが、いると思う。

これは生徒の進学に対する意思や意向の有無の以前の話として、進学先がないという現実を指摘している。

図表 2-17　高等部（本科）卒業後に進学したいと考える生徒



さらにこの設問では、「いる」という場合、例年の平均として何名くらいいるかを問うている。下表に示すように、「1 人」という回答が多いが、「4 人」という回答もある。

図表 2-18　進学したい生徒の平均的な人数

進学したい生徒平均人数	回答数
1 人	8
1～2 人	2
2～3 人	1
4 人	1

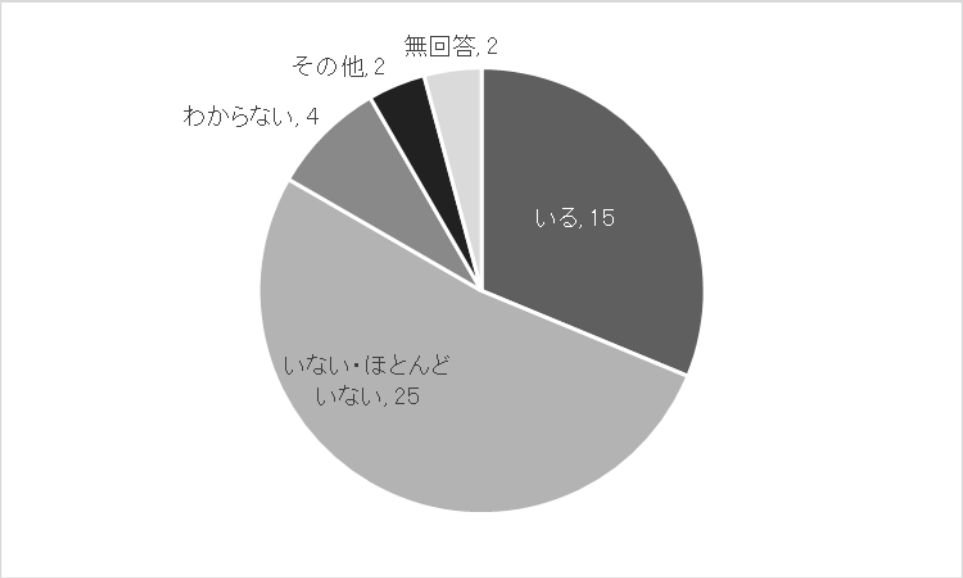
(2)　高等部（本科）卒業後に進学させたいと考える保護者

次のグラフは、専攻科を設置していない特別支援学校に対して実施した「卒業後も「引き続き学ばせたい」「進学させたい」と考える生徒（卒業年次生）の保護者はいるか」という質問に対する回答結果である。

上の設問と同じく「いない・ほとんどいない」が多数だが、「いる」という回答が生徒に比べて僅かだが多い。

この設問でも「いる」という場合、例年の平均として何名くらいいるかを問うている。下表に示すように、「1 人」という回答が多い。

図表 2-19　高等部（本科）卒業後に進学させたいと考える保護者



図表 2-20　進学させたい保護者の平均的な人数

進学したい保護者平均人数	回答数
1 人	10
1～2 人	1
2 人	2
3 人	1
4 人	1

2.3.3. 専攻科の状況

(1)　「卒業後も引き続き学びたい」「進学したい」と考える生徒

本科生に関しては、回答のあった 4 校から「12 人」「4 人」「5 人」「2～3 人」という具体的な人数が寄せられた。

専攻科生では 1 校から「1」人という回答があったが、他の 4 校はすべて「0 人」である。

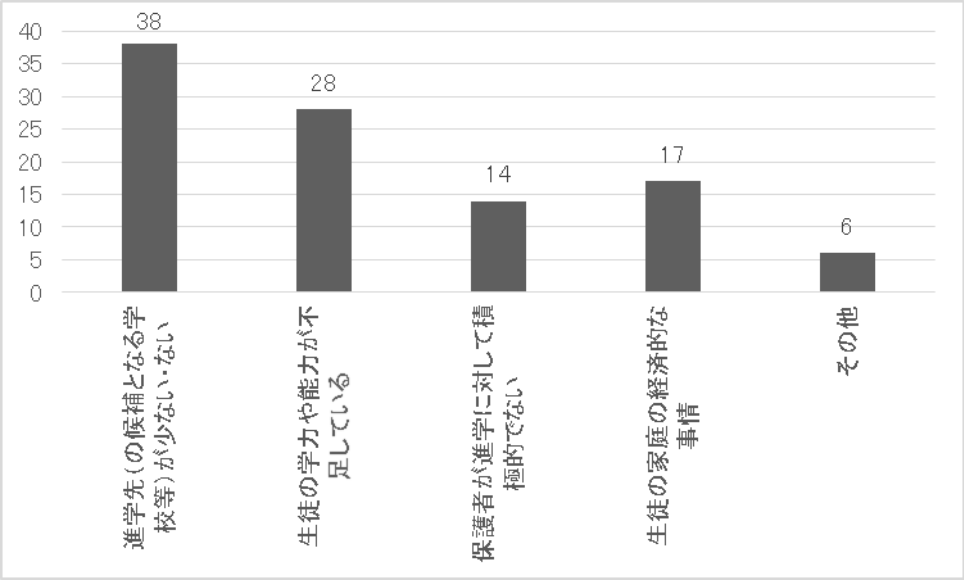
(2)　「卒業後も引き続き学ばせたい」「進学させたい」と考える保護者

本科生、専攻科生のいずれも、上記の生徒の意向とまったく同じ結果であった。

2.3.4. 進学を妨げる要因

次に示すのは、進学を妨げる要因（複数選択）について問うた結果である。進学先が少ない・ないという回答が最多となっている。

図表 2-21　進学を妨げる要因（複数選択）



「その他」として寄せられたコメントを以下に示す。

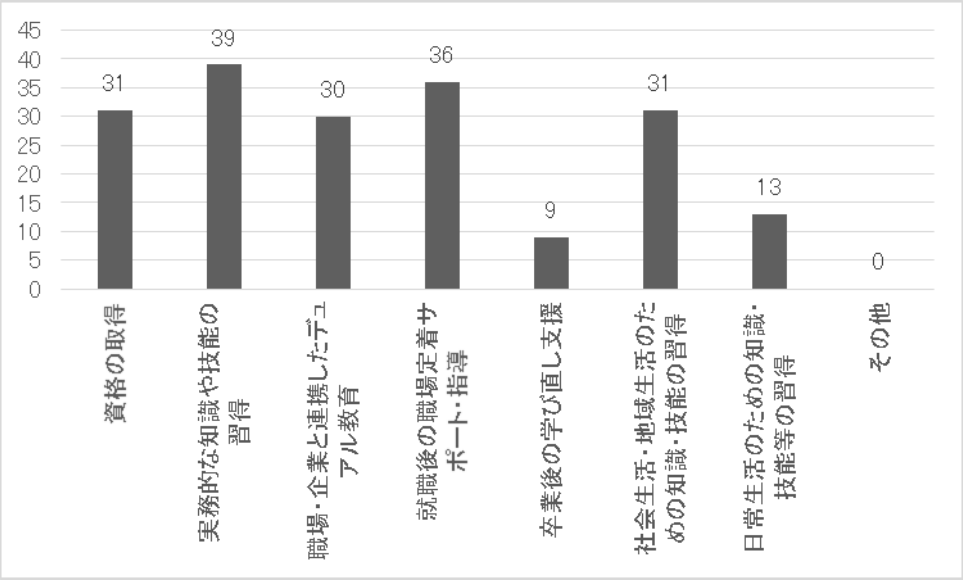
- 進学する学校の選択肢かがほぼないため
- 存在があまり知られていない。 周囲に事例が少ないため、イメージをもちにくい（選択肢となりにくい）
- 進学先を卒業した後の進路について、在学中の生徒に十分な情報提供ができないため、積極的に勧めることができない。
- 進学先を卒業したあとの移行が難しい
- 高校卒業の資格を持っていない
- 本人の意向

2.3.5. 専門学校への要望・意見

(1)　専門学校に重視してほしい教育

特別支援学校高等部卒業後の進路としての専門学校において、重視してほしい教育を問うた結果が次のグラフである。

図表 2-22　専門学校に重視してほしい教育（複数選択）



「実務的な知識や技能の習得」が 39 件（75%）で最も多い。以下、「就職後の職場定着サポート・指導」36 件（69%）、「資格の取得」と「社会生活・地域生活のための知識・技能の習得」31 件（60%）と同数で並んでいる。

(2)　専門学校に対する要望・意見等（自由記入）

専門学校に対する要望・意見等として寄せられたコメントを以下に示す。

- 知的障害特別支援学校高等部卒業後に専門学校への進学を考えた場合、入学資格がない場合がある。専門学校の入学資格を明確にしていただくとともに、現在入学資格がない専門学校にも門戸を広げてほしい。
  【５】に記したように、知的障害のある障害者を対象としたコースを設けてほしい。
- 知的の特別支援学校に入学し卒業すると、卒業後の進路の幅がせまくなってしまう。介護やサービス、ＰＣ等の職種を希望する生徒が増えているため、そのようなニーズに対応できるような学校を望みます。
- 資格はあれば良いと思う

- 知的障害を主とする支援学校のカリキュラムのため、通常の専門学校への進学するための学びの場がない。また、単位制ではなく、授業の総時間数が卒業条件になるため、専門学校の受験の要件に欠けることもある。
- 選択できる専門学校がない。またあったとしても進学できる力（能力）が備わっていないためできないと思う。
- 能力をつけるための期間が長いと良い（２．３年くらい）　当然能力にもよりますが、ある程度卒業後の行き先（就職口）が保証されていると進学も選択肢になりやすいかと思います。
- 特別支援学校の高等部までの教育は全教科に渡り広く浅く学習している。専門学校では、その上に立って各特性や興味関心の高い分野を選択して学習できる場所になってもらいたい。
- 知的障害のある方々が専門学校へ進学できる、受け入れてもらえるとなれば進学を希望し、期待する保護者は多いと思う。保護者の期待が何であるのかをよく把握して教育していただく事を望む。
- 障害があっても高等部卒業後に就職して社会人としてがんばっている生徒は多い。「進学」のメリットやこんな生徒には進学が向いている等の情報がはっきり開示されていると良いと思う。
- 特別支援学校（知的障害）を卒業後，専門学校へ進学した生徒もいたが，適切な支援を受けられず，（障害のない人たちとの）差が大きくなってしまい，卒業することができなかった。 専門学校での受け入れをする場合､障害理解に加え，適切な支援のできる体制や就労支援等が必要でとあると感じている。
- 進路として、専門学校の選択肢が増えるとしたら、とてもありがたいことです。
- 毎年 1、2 名は、一般企業に就職するために、もう少し学ぶ（訓練）期間が必要だと思う生徒がいます。移行支援事業所や能力開発校だけでなく、専門学校で学びたいという生徒も必ずいると思います。
- ・専門学校と卒業後のアフターケアはどこまでかかわっていただけるのかを知りたいです。
- 専門学校の進路の情報がほしい。
- 本校では実習と称して専門学校の授業体験をします。その時点で合否について進言していただきたいと思います。
- 生活に関する事、職業に関すること、学業に関することをバランス良く指導していただけると良い。高等部卒業時点で叶えることができなかった夢を諦めることなく、さらに自分自身の能力を向上させ、夢を叶える生徒が増えれば幸いである。
- ・高等部 3 年間で成長しきれない生徒の指導を高等部と連携してお願いしたい。
  ・就労移行事業所の活動と学校での教育の中間的活動を期待したい。
- ・就職するための支援と定借の支援（関係機関と連携して）

・保護者との連携、共通理解を図って進路選択、決定して欲しい。（本人の考えだけでなく、保護者のサポートが大切であるため）

- 本校の生徒の様子をみると、専門学校へ進むものは少ないが、多様の生徒の価値や興味を考えると専門学校の必要性は感じています。
- ・もっと学びたいと思っている生徒もいると思いますので、通いやすい環境にあればと思います。

  ・またその後の就職支援をしっかりとしていただけると安心かと思います。
- 本人のみならず家族のサポートが重要である。